

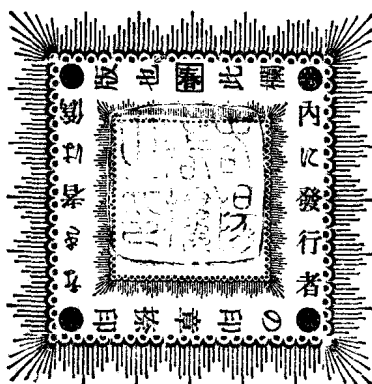
續金瓶梅
卷之五

續金瓶梅
卷之五



續
ニ
金
色
夜
叉

著 作 權 有



明治三十六年六月九日印刷
明治三十六年六月十二日發行

著 者

尾崎德太郎

發行者

和田 勉 光

印刷者

齋藤章達

發行所

春陽堂

印刷所

東京印刷株式會社

電話浪花 千三百二十五番

東京市日本橋區兜町二番地

電話本局五拾壹番

東京市日本橋區通四丁目角

東京市日本橋區兜町二番地

東京市日本橋區通四丁目五番地

續續金色夜叉

續續	後編	中編	前編
實價	實價	實價	實價
金五拾錢	金四拾錢	金六拾錢	金六拾錢

續續金色夜叉

紅葉山人

(臺)

貫一が胸は益苦しく成り愈りぬ。彼を念ひ、是を思ふに、生きて在るべき心地はせで、寧ろ彼の怪しき夢の如く成りなんを、快からず乎と疑へるなり。

彼は空しく萬事を抛ちて、懊懷の間に三日ばかりを過しぬ。

之を語らんに人無く、懇へんには友無く、而も自ら拯ふべき道は有りや。有りこも覺えず、無しこは知れど煩ふ者の

煩ひ、悩む者の悩みて縦^{たて}なるを如何にせん。彼は實に此の昏迷^{こんめい}亂擾^{らんじやう}せる一根^{いっこん}の惡障^{あくしやう}を抉去^{くつさり}りて、猛火^{まうか}に燬^やかんことを冀^きへり。爾時^{そのとき}彼は死ぬべきなり。生乎^{せいかに}、死乎^{しか}。貫一^{くわんいつ}の苦悶^{くもん}は漸く急にして、終に此の問題の前に首^{かうべ}を垂るゝに至れり。

値無^{あたひな}き吾^{われ}が生存^{せいぞん}は、又同く値無^{あたひな}き死亡^{しとう}を以つて畢^をへしむべき者乎。悔^くに堪^たへざる吾^{われ}が生^{せい}の値無^{あたひな}かりしを結^{むす}ばんには、之を償^{つぐな}ふに足る可き死を以て爲^なざる可からざる乎。或は、此に過^こ多^たき半生^{はんせい}の最期^{さいき}を遂^とげて、新^{あらた}に他の値ある後半^{こうはん}の復活^{ふくわつ}を明日に計^{はか}るべき乎。

彼は強^{あなが}ちに死を避けず、又生を厭ふにもあらざれど、兩^{ふたつ}な

がら其の値無きを、私に屑しと爲さるなり。當面の苦は彼に死を勧め、半生の悔は耻を責めて假さず。苦を抜かんが爲に、我は値無き死を辭せざるべき乎。過を償はんが爲に、我は樂まざる生を忍ぶべき乎。碌々の生は易し、死は則ち難し。碌々の死は易し、生は則ち難し。我は悔いて人と成るべきか、死して其愚を全うすべき乎。

貫一は活を求めて得ず、死を覓めて得ず、居れば立つを念ひ、立てば臥すを想ひ、臥せば行くを懷ひ、寐ぬれば覺め、覺むれば思ひて、夜もあらず、日もあらず、人もあらず、世もあらで、惟憂ひ惑へる己一箇の措所無く可煩しきに惱亂せり。

恰あたも此際このさい抛なげち去るべからざる一件の要事ひやうじは起りぬ。先に
 大口おほぐちの言込いひこみ有りし貸付かひつけの緩々急だるくきふに取引迫せまりて、彼は些ちとの
 猶豫い、よも無く、自ら野州鹽原やしはばらなる畑下はたやひに云へる温泉場に出
 向むかひ、其處そこに清琴樓せいきんろうと呼べる湯宿ゆやどに就きて、密ひそかに云々の探たん
 知もすべき必要を生じたるなり。

謂知いひしらず懸うるさしと腹立たれれど、行懸ゆきがとの是非無く、且は難
 得がたき奇景の地と聞及きつべば、少時しばしの憂うれを忘るゝ事も有らん
 と、自ら努つとめて結束けつそくし、彼日かのひより約一週間の後、彼は幾ほど進
 まぬ足を曳ひきて家を出でぬ。

其晨横雲そのあしたのけいむ白く明方あけがたの空に半輪はんりんの残月を懸けたり。一番列
 車を取らんご上野くろまに向ふ俾この上なる貫一くわんいちは、此の曉あけの眺

囑に撲れて、覺えず悚然たる者ありき。

(臺)の二

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改まれど、貫一は易らざる其の悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の獨に倦み憊れつく、始めて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今尙茫々たる古の那須野原に入れば、天は濶く、地は遐に、唯平蕪の迷ひ、斷雲の飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞ見え、行くほごに路は窮らず、漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡る處に淙々の響有りて、之に架れるを入勝橋と爲す。

輒ち橋を渡りて僅に行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷
 に壑深く陥りて、幾廻せる葛折の、後には密樹に聲々の鳥
 呼び、前には幽草歩々の花を發き、逾よ躋れば遙に木隱の
 音のみ聞えし流の水上は淺く露れて、驚破や、斯に空山の
 雷白光を放ちて頽れ落ちたる乎と凄じかり。道の右は山
 を剗りて長壁と成し、石幽に蘚碧うして、幾條とも白絲を
 亂し懸けたる細瀑小瀑の珊々として濺げるは、嶺上の松
 の調も、定て此緒よりやと見捨て難し。

車を驅りて白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑
 を蹠みて、山中の景は始て奇なり。之より行きて道有れば
 水有り、水有れば必ず橋有り、全溪にして三十橋。山有れば

巖^{いは}有り、巖^{いは}有れば必ず瀑^{たき}有り、全嶺^{ぜんりやう}にして七十瀑^{はく}。地有れば泉^{いづみ}有り、泉^{いづみ}有れば必ず熱^{あつ}有り、全村^{ぜんむら}にして四十五湯^{たう}。猶^{なほ}數^{かず}ふれば十二勝^{しやう}、十六名所^{めいしよ}、七不思議^{ししぎ}、誰^{たれ}か一々探^{たん}り得^えべき。

抑^{おさ}も鹽原^{しほや}の地形^{ちけい}たる、鹽谷^{しほや}郡^{ぐん}の南^{みなみ}より群峯^{ぐんぽう}の間^まを分^わけて深く西北^{しほく}に入り、綿々^{めんく}として箒川^{はうがは}の流^{なが}に沂^{さか}る片岨^{かたそ}の、四里^{しり}に岐^{わか}れ、十一里^{じふいちり}に亘^{わた}りて、到^{いた}る處^{ところ}巉巖^{せんがん}の水^{みづ}を夾^{はさ}まざる無^なきは、宛然^{さながら}青銅^{せいどう}の藥研^{やげん}に瑠璃^{るり}末^{まつ}を碎^{くだ}くに似^にたり。

先^{まづ}づ大網^{おほあみ}の湯^ゆを過^かれば、根本^{こんぽん}山^{やま}、魚止^{うし}瀧^{たき}、兒^こケ淵^{ふち}、左^{ひだり}靱^きの險^{けん}は古^{ふる}りて、白雲^{はくうん}洞^{どう}は朗^{はら}かに、布瀧^{ふたき}、龍^{りゆう}ケ鼻^{はな}材^{ざい}木^{もく}石^{いし}、五^ご色^{しき}石^{せき}、船^{ふね}岩^{いは}なんご^なと眺^{ながめ}行^ゆけば、鳥井^{とりゐ}戸^ど、前^{まへ}山^{やま}の翠^{みどり}衣^{ころも}に染^そみて、福渡^{ふくわた}の里^{さと}に入^いるなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが、甚だ興有りこ目留まれば、又此邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く蔽へる岸樹は陰々こして眠るに似たり。貫一は覺えず踏止りぬ。

彼の逆卷く波に分け入りし宮が、息絶えて浮び出でたりし其處の景色に、似たりこも酷だ似たる岸の布置、茂の状況、乃至は漾ふる水の文も、透徹る底の岩面も、廣さの程も、位置も、趣も、子細に看來れば逾よ差はず。

彼は眦を決きて寒慄せり。

怪むべき哉、曾て經たりし場を其のまゝに夢むる例は有れ、所據も無く夢みし跡を、歷々こ慙く目前に見るこ云ふ

も有る事乎。宮の軀の横りし處も、又は己の追來し筋も、彼處よ、此處よ、陰に一々指しては、限無く駭けるなり。

車夫を顧みて、處の名を問へば、不動澤と言ふ。

物可恐しげなる澤の名なるよ。げに思へば、人も死ぬべき處の名なり。我も既に死なんこそせしが、有繋現の身にも沁む時、宮にはあらで山百合の花なりし怪異を又懷ひて、彼は肩頭寒く顫ひぬ。

卒に踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、咄々、何等の物乎、と先驚かさるゝ異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見擧る絶頂には、はらゝ松も危く立竦み、幹竹割に割放したる断面は、半空より一文字に垂下して、岌々たる其勢幾

と眺むる眼も留らず。

貫一は惘然として佇めり。

彼が官を追ひて轉び落ちたりし谷間の深さは、正に此の
天邊の高きより投じたらんやうに、再々として虚空を舞
下る危惧の難堪かりしを想へるなり。

我未だ嘗て見ざりつる絶壁！危しとも、可恐しとも、夢な
らずして争か飛下り得べき。又此の人並ならぬ雲雀骨の
粉微塵に散つて失せざりしこそ、洵に夢なりけれ、身柱
冷かに瞳を凝す彼の傍より、是こそ名にし負ふ天狗巖、こ
爲たり貌にも車夫は案内す。

貫一は彼の夢の奇なりしより、更に――奇なる此の鹽原

の實覺じつかくをば疑うたがひ懼おそれつく立盡たてつきせり。

既に如此かくのごとくなれば、怪くわいは愈くわよ怪くわに、或は夢中に見たりし踪あとの猶着々ちやくくくわつげん活現くわつげんし來りて、飽くまで我を脅おびさざれば休やすまざらんご爲るにあらずや、ご彼は胸安からずも足に信まかせて、彼巖かのいわの頭上づえんに聳そびゆる邊あたりに到れば、谿急たにきふに激折げきせうして、水之が爲に鼓怒こどし、咆哮ほうかうし、噴薄ふんぱく激盪げきだうして、奔馬はんばの亂れ競きふが如し。此の亂流らんりゅうの間に横よこたはりて高さ一丈に餘り、其頂たひらかは平ひらに濶ひろりて、寬ゆたかに百人を立たしむべき大磐石だいばんちやく、風雨に歲經としふる膚はだは死し灰かいの色を成して、鱗うろこも添そはず、毛も生はひざれど、狀かたち可恐おそしげに蹲うづまりて、老木らうぼくの蔭かげを負おひ、急湍きふたんの浪なみだに漬ひたりて、夜なく天狗巖てんかういふの魔風まふうに誘さそはれて吼ほえもしぬべき怪しの物なり。

其古蒲生飛驒守氏郷此の處に野立せし事有るに因りて、
野立石とは申す、この例のが説出すを、貫一は頷きつゝ、目も
放たず打眺めて、獨り竊に舌を卷くのみ。
彼は實に壑間の宮を尋ぬる時、箇の大石を眼下に窺ひ見
たりしを忘れざるなり。

又は流るゝ宮を追ひて、道無きに困める折、左右には水深
く、崖高く、前には攀づべからざる石の塞りたるを、攀ぢて
半に到りて進退谷りつる、其石も是なりけん、この肩は自
聳えて、久く留るに堪へず。

數歩を行けば、宮が命を沈めし其淵を見るべき處も、彼が
釋けたる帶を曳きし其巖も、歴然として皆在らざるは無

し！貫一が髮毛は針の如く立ちて戦げり。彼の思は前夜の悪夢を反復すに等しき苦惱を辭する能はざればなり。夢ながら可恐くも、淺ましくも、悲くも、可傷くも、分く方無くて唯一圖に切なかりしを、事偷し一場の夢にして止らざらんには、抑も如何！今や鹽原の實景は一々夢中の見る所。然らば此景既に夢ならず！思掛けずも此に來にける吾身も亦夢ならず！但夢に缺く者こそは宮一箇のみ。纔に彼の此に來らざるのみ！！

貫一は慙く思到りて、我又夢に入りたるにあらざる乎？疑はんことも爲つ。

夢ならずと爲ば、我は由無き處に來にけるよ。幸に夢に似